

## 別紙：批判的意見に耳を傾けない開発局の回答について

### 1. 治水効果のない下川町のダム建設要望についての以下の疑問に対する無回答

パブコメ意見：「検討の場に出席した天塩川流域の各自治体首長の多くは、治水のためにサンルダムが必要だと述べています。とくに下川町長と士別市長が熱心に訴えています。しかし、下川町の市街地は、主に名寄川の左岸にあり、かつサンル川と名寄川の合流点より上流に位置しています。したがって、下川町はサンルダムがあってもダムの治水の効果を受けません。士別市はまったくサンルダムとは関係のない場所です。地元の要望でダムを作るという根拠は失われているのではないのでしょうか。開発局の認識をお尋ねします。」

### 2. 住民意識に対する開発局の認識についてのパブコメに対する無回答

パブコメ意見：北海道開発局が1998年に流域約5,000世帯に行なったアンケートでは、洪水・土砂災害に対する安全性について、安全だと思う(55%)・ある程度安全だと思う(34%)で、安全性について心配していない割合が89%もありました。これは、それまでの北海道開発局などの河川改修を評価した結果と考えられます。洪水対策として具体的に進めてほしいことは、河岸保護工(37%)、堤防の完成(25%)、内水対策(16%)、河道の掘削(15%)で、合せて93%が河道の改修などと内水対策を望んでいて、ダムの整備の要望は7%に過ぎませんでした。それなのに、サンルダムが必要というのは、民意を反映していません。サンルダム建設が必要と考えているならば、あらためてアンケートを実施してください。

3. 名寄川の目標流量1,500m<sup>3</sup>/秒についての疑問に対する回答は、質問内容に答えていない。開発局は、流量計算を行って被害額が最大となる降雨パターンを選んだと回答しているが、私たちは、真敷別流量が大きいほど被害額が大きくなるという不自然な方法で目標流量を決めたことを批判していて、真摯に回答していない。

以下の表は、戦後最大の洪水のときの、実績と開発局の推定に基づく値です。

実績降雨パターン		ピーク流量(m <sup>3</sup> /s)			氾濫面積(ha)	浸水家屋(棟、戸)	被害額(億円)
		菅平	名寄大橋	真敷別			
S48・8	推定	4400	2000	1500	9800	12000棟	6300
	実績	3500	1218	1115	12775	1255戸	42
S50・8	推定	4400	2700	1200	8700	5000棟	2500
	実績	3600	1500	949	11640	2642戸	120
S56・8	推定	4400	2200	700	11200	1700棟	1100
	実績	4000	1889	602	15625	546戸	78

### 名寄川の治水についての提案に対する無回答

この表を見ると、推定では氾濫面積が小さいのに浸水家屋は10倍も多いとか、実績被害額が42億円なのに推定被害額が6300億円など、開発局の推定が不可解なことがわかります。

この数値を用いて名寄大橋と真敷別の流量と被害額との間の関係について重回帰解析を行った。

被害額；Y(億円)、名寄大橋流量(m<sup>3</sup>/秒)：X1、真敷別流量(m<sup>3</sup>/秒)：X2

推定  $Y = -2.96 * X1 + 5.76 * X2 + 3580$

実績  $Y = 1.02 * X1 + 1.27 * X2 - 2617$

推定のS48・8パターンでは、名寄大橋流量の寄与は、 $-2.96 \times 2000 = -6,512$ 億円、真敷別流量の寄与は、 $5.76 \times 1500 = 8640$ 億円、名寄大橋の流量が大きければ被害が少なく、真敷別流量

が大きければ被害額が大きくなる仕組みとなっていて、名寄川大橋の流量が大きくなれば被害額が減少するということはありえない。

実績の S48・8 パターンでは、名寄大橋流量では、 $1.02 \times 2000 = 2040$  億円、真敷別流量では、 $1.27 \times 1500 = 1905$  億円で、両方の寄与はほとんど同じで、現実的である。

#### 4. サンプルダムより河道掘削案がよいという意見に対する無回答

パブコメ「ダム案の残事業費は 760 億円（うちサンプルダム洪水調節残事業費は 130 億円）、2 案では 940 億円（うちサンプルダム関係は 310 億円）で、河道掘削案は 1 案より 180 億円大きな値となっている。しかし、ダムによるサクラマスなどの被害、河川環境の悪化などを考えると、河道掘削案は 180 億円よけいにかかるが、ダム案よりベターである」

#### 5. サンプルダムが水漏れダムになる懸念に対して無回答

パブコメ「ダム堤体直下を上流から下流にかけての地下 50～60m にルジオン値で 60 以上（100 以上との記録もある）異常な水の道が存在する。しかし、手当てされない。カーテングラウチングで堤体下部をボーリングし、コンクリートミルクを注入し水漏れ対策できるのは 20m までである。ダムが完成し水を溜めると堤体付近ほど水深がある。すなわち水圧が高くなる。これが原因でダム下流側に水が吹き出ることが心配である。水漏れである。

この対策は相当に困難であり、費用は莫大となる。すなわちダム建設・維持コストが大きく跳ね上がることが懸念される。」

#### 6. サクラマスへの影響を最小限にするというあいまい表現批判に具体的回答がない

開発局は、「現計画案においては、魚道の設置によりサンプルダム地点におけるサクラマス等の遡上・降下の機能を確保することにより、魚類の生息環境への影響を最小限とするよう取り組むこととしている。」と述べている。これに対して、私たちは、以下の前川北大名誉教授の意見に対する、開発局からのきちんとした回答を求めたい。

前川光司北大名誉教授は、開発局・魚類専門家会議の進め方について疑問があり、以下の取り組みを提案している

- (1) 現在と比べてサクラマスをどれほど保全しようとしているのか、目標を示さなければならない
- (2) まず現在のサクラマスの遡上数とスモルトの降下数を 5 年間調査する。
- (3) 魚道と分水施設を造り、魚道を通して遡上したサクラマス数と降下したスモルト数を 5 年間調査する。
- (4) その時点で魚道の効果が目標を達成したか判断する。この時点で魚道によるサクラマス保全の効果が目標に達しなければ、ダム建設を行わない。

この問題に対する開発局の考え方を示していただき、ダム建設をしようとするのであれば、この提案に即した対応をしていただきたい。」と批判した。

開発局の回答は、1) 「魚道によって、魚類の生息環境への影響を最小限とするよう取り組むことから、魚類の生息環境への影響を最小化すると評価した」、2) 「二風谷ダムと美利河ダム魚道を参考にして取り組むことによって、魚類の遡上・降下の機能を確保できる」と回答。

1) では、やればできるという非科学的な夢物語を語り、2) では、二風谷ダムでも美利河ダムでも極めてわずかに遡上していることをもって、最小限とする、としていて、前川北大名

誉教授の意見に具体的にこたえていない。私たちは、開発局が、前川名誉教授の意見に、具体的にきちんとしたきちとした回答をするよう求める。

#### 7. 流水の正常な機能の維持への疑問にまともに答えていない

パブコメ「魚類のための正常流量は、魚類が産卵のために遡上してきても、流量が少ないと水深が浅くなり遡上できなくなるので、産卵障害がおきて、ひいては魚類の再生産が阻害されて、魚類が減少する、という想定に基づいている。しかし、これは単なる机上における想定で、実際に阻害が起きているかどうかについて河川整備計画に示されていない。・・・どうしても正常流量が必要と主張するならば、正常流量が維持されなかった場合のサクラマスへの影響について具体的根拠を示していただきたい。」

開発局の回答は、「ダム事業の検証に係る再評価実施要領細則」で規定に基づいて検討している。」と答えるのみで、具体的根拠を示すことができないでいる。

#### 8. 費用対効果の便益が過大になるように設定されているという疑問に具体的に答えない

パブコメ「過去の水害被害額が多くて 120 億円なのに、費用対効果のシミュレーションでは数千億円としていて、その原因は、洪水が天塩川全流域で起きるという実際とは異なる想定によるので、現実的な計算を行うべきである」

#### 8. 費用対効果の便益が過大になっていることに対して、具体的回答はない

パブコメ「氾濫するときはすべてのブロックで氾濫するようにしている。その上で、ダムのあるときとないときの被害額を算定して、ダムなしの被害額とダムありの被害額との差をダムの効果として計算している。実際の氾濫では、上流で氾濫すると、下流では河川流量は減少して氾濫しにくくなるが、シミュレーションではそのことが考慮されていない。当然、被害額は実際のものより高額になり、そのためダムの効果も高額となる性格をもっている。」  
開発局の回答「治水経済調査マニュアル」に基づき検討を行った」というもので、すべてのブロックで氾濫するという実際とは異なる条件で被害額を算出していることに対する回答はない。